

第35回 郷土の先賢顕彰者紹介

3階 郷土先賢室



婦人会で新しい風を吹かせたリーダー

ぎやくし
瘡師 テイ (1904～2003)

瘡師テイ(旧姓 中久木テイ)は、明治37年(1904)東京都に生まれる。教育者の父の転勤で富山市に移住する。女学校を卒業した後、東京共立女子職業学校甲部師範学校(現共立女子大学)に進学し、教員の道を志す。大正14年(1925)、師範学校を卒業し、東京で家庭科の教員になる。大正15年(1926)4月8日、知人の紹介で、船員である瘡師重雄と出会い結婚。結婚後は、夫の仕事のため神戸に住み、小学校に教員として勤めながら二人の息子を育てる。昭和19年(1944)8月、激化する戦争による物資不足等から夫の実家がある鷹栖村(現砺波市鷹栖)に移住する。村は庄川と小矢部川にはさまれた扇状地で井戸水は豊富な地域である。しかし、井戸掘りには多額の費用がかかったため、近くの川や用水を飲料水に利用する家もあり、衛生面や安全面で課題があった。農家の女性たちが農作業や家事に朝早くから夜遅くまで働き続ける姿を見て、都会で共働きをしていたテイは農村での暮らしに驚きや疑問をもつようになる。

昭和22年(1947)、鷹栖村に新体制の婦人会ができる。翌年、しがらみや慣習にとらわれないテイが婦人会長に選ばれる。テイは県内に先駆けて新しく会則や「鷹栖婦人会会歌」をつくる。また、季節託児所を開き、小学校の給食を当番制にして提供するなど、母親たちが必要とすることを取り上げて、婦人会活動として行う。研修会では、テイは民主的な婦人会の在り方を語ったり、家庭科教員としての知識を生かし、農村の生活習慣や台所の改善の推進を図ったりした。昭和28年(1953)5月1日には、地域からの要望の多かった常設の鷹栖婦人会立鷹栖幼稚園(旧鷹栖保育所)を開き、テイが初代園長になる。婦人会立の幼稚園は十分な設備や給食がなかったが、テイのたゆまぬ情熱によって、婦人会の会員が協力して米や野菜を持ち寄り、幼稚園の給食を当番で作るなど地域を巻き込んだ活動が行われる。

昭和29年(1954)1月、東砺波郡に編入していた鷹栖村は合併問題に揺れることとなる。鷹栖村は現在の砺波市、南砺市、小矢部市に隣接しており、明治時代から行政区が西砺波郡、東砺波郡と変わった。行政の都合でその都度、旧来からの村内の区割りを変更されることで生じる行事や生活での不便さ、農村が商家のある地域と合併することに不満が高まり、村内で合併について意見がまとまらなかった。その対立から村長および全村会議員が任期を1年以上残して総辞職。選挙までわずか1か月足らずの中、婦人会活動や高等学校の教員もして、地域住民の信頼と尊敬を集めていたテイに、地区内の村人たちが立候補を依頼する。そして、女性の参政権が認められてから3回目の村議会議員選挙で、唯一の女性候補であったテイが当選する。テイの尽力もあり、保育所の存続などの合併の条件を整え、昭和30年(1955)、鷹栖村は砺波市へ合併する。

後に砺波市教育委員・委員長や富山地方裁判所調停委員等を歴任する。婦人会長、教員、園長、議員と肩書は次々と変わったが、どの立場でも苦勞や困難にも挫けず、自分だけでなく、周りの人のために活動した。健康維持のために、食生活や歩くことにこだわり、平成15年(2003)4月に98歳という、その長い人生に幕をおろした。

<専門員 星野 貴昭>

鷹栖婦人会会歌
作詞 宮本康政
作曲 吉田為子
砺波野の土ぞ香ぐわし
まどかなる村 空にみてる光
森かげに ただよう夢
なでしこの群 女の集い
くわ かし 吹ぐ手もちて
癒しめ 秘めし眸もちて
幸せを 豊さを こに夢でん
鷹栖に集こもる夕
鷹栖を果立つ朝も
やさしく 強く つつましく
希望を胸に 心協せん

婦人会会歌 (S25.11制定)



鷹栖婦人会立
鷹栖幼稚園
開園式 (S28.5.1)
向かって右の右
スーツ姿の初代園長
テイ